

中山 紀子*

Noriko NAKAYAMA *



ドイツに再現されるトルコの村

—ドイツ、ドルトムント市におけるトルコ人移民調査に関するフィールド日記

A Turkish Village Formed in Germany :

Field notes of the survey on Turkish immigrants in Dortmund, Germany

1 はじめに

本稿の大部分は、筆者が2010年2月24日から2010年3月4日までドイツ、ドルトムント市(図1参照)において行なったトルコ人移民調査に関するフィールド日記である。筆者が実際に調査中につけていた日記のほぼ全文である。人物名は特定できないように仮名としている。このような形で日記を公開することに賛否両論あるが、まずは調査報告の基礎資料として残すことに意味はあろうし、また、民族誌の一種の記述方法として、調査者である筆者の動向を含め

た日記を用いることが有効かどうか問いかける意味があると考ええる。まず、今回の調査にいたるまでの経緯を説明し、そののちにフィールド日記、最後にフィールド日記から浮かび上がるトルコ人移民の特徴を考察したい。

2 調査にいたる経緯

筆者は、1992年5月より1993年6月にいたるほぼ1年間、トルコ黒海地方ゾングルダク県M村(図2参照)においてフィールドワークを行なった。フィールドワークの期間、M村のなか



図1 ドルトムントの位置

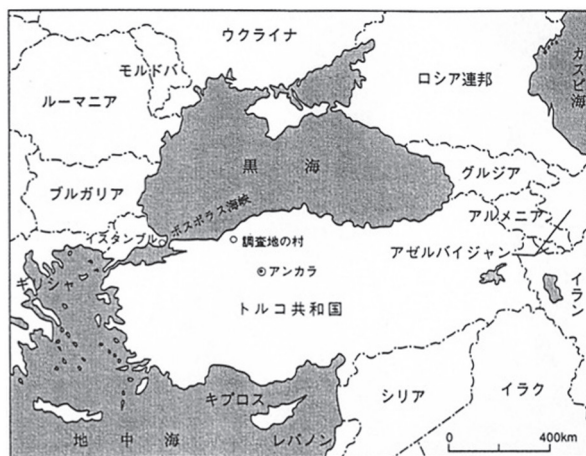


図2 トルコ共和国の位置と調査地のM村

[中山 1994 : 263]

図2 M村の位置

* 中部大学国際関係学部国際文化学科

のG家に滞在していた。当時のG家の家族構成は、父(79歳)、母(78歳)、次男(36歳)、次男の妻(40歳)、未婚の長女(49歳)の5人であった。父母には同居している次男と長女以外に3人の子ども、次女(46歳)、三女(44歳)、長男(41歳)がおり、次女と長男はM村近くの町に住んでいたが、三女は家族とともにドイツに在住していた。三女の夫(45歳)は次男の妻の兄にあたり、彼らの結婚はトルコでよくみられる、お互いの姉妹を妻としあう交換婚であった。さらに彼らは曾祖父同士が兄弟であり、同じ親族集団の一員として隣接する家屋に住んでおり、関係は近い。筆者がM村にいる間に、三女や三女の夫は何度かドイツからM村に帰省しており、三女の実家に住む筆者とは顔見知りであった。筆者はフィールドワーク終了後、1996年、1997年、2007年、2009年にM村を短期に訪問しているが、訪問時期がドイツの夏季休暇と重なることもあって、その都度三女夫婦と顔を合わせていた。2009年に会った時、移民調査のためドイツに行きたい旨をつげたとこ快諾してもらい、ドイツ、ドルトムント市にある彼らの家に泊めてもらえることになった。

三女の夫(1947年生まれ)は、1970年より25年間ドイツで働いていた。職業斡旋協会(Iş ve İşçi Buluma Kurumu)に申請して選考・試験を経るという正式のルートで行った。ドイツに行く前に1968年から県内の炭坑で働いていたため、ドイツでも炭坑労働者として働いた。当初仕事場の4人部屋に寝泊りしていたが、1973年に妻を呼び寄せた。三女夫婦には2人の息子と4人の娘がおり、すべてドイツ生まれである。2010年現在全員が結婚している。長男夫婦がトルコのM村近くの町に在住しているだけで、他の子どもたちはすべてドイツに在住している。ここか

ら、三女の夫を父A男(63歳、2010年現在、以下同じ)、三女を母B女(62歳)とし、三女夫婦の子どもたちを生年順に、長女C女(36歳)、次女D女(35歳)、三女E女(32歳)、長男F男(31歳)、四女G女(29歳)、次男H男(27歳)、それぞれの配偶者を、C女の夫I男(37歳)、D女の夫J男(36歳)、E女の夫K男(34歳)、長男F男の妻L女(29歳)、四女G女の夫M男(年齢不明)、次男H男の妻N女(29歳)とする。

A男B女夫妻は、1年のうちほとんどをトルコのM村で過ごしており、ドイツには冬の2カ月ほどしか滞在しない。滞在するときは、ドイツで購入した自宅に住む。自宅には通常次男夫婦とその娘2人(7歳と10歳)が住んでおり、A男B女夫妻が戻ったときは寝室を明け渡す。A男B女夫妻の自宅は4階建ての建物で、1階を賃貸に、2階を長女夫婦に住ませ、3階と4階(屋根裏部屋)を自宅にしていた。屋根裏部屋は客用でもあり、筆者はここを使わせてもらっていた。ドイツ在住の次男夫婦と長女夫婦以外の娘夫婦たちは賃貸の借家に住んでいた。これらの住居はかつて炭鉱労働者たちの住居として作られたのが現在は賃貸となっている建物である。A男B女夫妻も2002年までこうした借家に住み、その後現在の建物を購入して引っ越した。彼らすべての家はお互いに近くそれぞれ歩いて5分程度で行ける近距離にある。ちなみに、トルコに住む長男夫婦はM村の近くの町に父A男が購入した豪華なアパートに住んでいる。M村にも大きな家があり、町と村を往復している。

3 フィールド日記

2月24日(水)

徹夜で荷造りをし、始発の電車に乗る。ルフ

トハンザ航空のパイロットによるストライキの影響で、ルフトハンザ便から、エア・チャイナ航空による名古屋－北京－ローマ、エア・ベルリン航空によるローマ－デュッセルドルフに変更させられた。北京でローマ行きの便が3時間遅れで出発し、この日は結局ローマ泊。北京からA男氏に変更を連絡。今夜ドルトムントからデュッセルドルフ空港まで迎えに来てくれることになっていた。携帯電話に感謝。夜11時にA男氏から電話あり。

2月25日(木)

ローマ空港でルフトハンザ航空に掛け合い、ローマ2:00pm発－デュッセルドルフ4:00pm着の飛行機に乗る。A男氏に知らせると5時に迎えに行くという。デュッセルドルフ空港到着後、同乗のロシア人女性に道を聞かれしばらく同行。5時にA男氏、妻B女、三女の夫K男が現れる。三女の夫K男の運転で高速を飛ばす。今晚、家の向かいにあるジャーミ（モスク）でカーディル・ゲジェシ(kadir gecesi。イスラームの聖なる5夜のひとつ。集団で祈ることが推奨されている）があり、それに間に合うようにであった。このジャーミはネットで前もって確認していたジャーミであった。撮影してかまわないとB女に言われるが少々遠慮がちになる。2階の女性の場所を撮影した後、1階の男性の場所にも行く。A男氏の知り合いだという男性が話をしてくれる。

2月26日(金)

9:30朝食をしっかりと食べる。ブルチュンというパンがおいしいと勧めてくれる。小学校から孫娘が手にケガをしたと戻ってくる。のち次男夫婦は親子3人で病院に。筆者はA男

とB女と共にテレビを見る。テレビはトルコから衛星放送されている「結婚（イズディヴァチ, izdivacı）」という結婚仲介番組。派手な女性司会者がおもしろい。この他、「ヤルチュンラル(Yalçınlar)」という公開ゴシップ雑誌のような番組を熱心に見ていた。昨夜準備したかつての村の写真満載のデジタルフォトフレームをプレゼントする。A男がアプテスト（清め）ののちジャーミへ。次男夫婦とともに近くのスーパーへ買い物。とくにトルコ人用ではないそう。帰宅中次男がドイツ人の友人と出会う。B女と近くに住む三女E女(1977年生まれ)の家に行く。三女E女の夫K男(1976年生まれ)、娘(8歳)、息子(5歳)の二人の子供がいる。三女の夫K男は筆者がM村に滞在中隣の家に住んでいた若者で筆者とは近い関係にある。彼は機械洗浄の仕事を不定期にしている。三女E女はちゃきちゃきとした性格で母B女に似ている。夫K男に不満はないが21歳での結婚は早すぎるとかなり親に抵抗したという。給料をきかれたが即答できなかった。三女E女の家賃は350ユーロ、光熱費込で520ユーロ。他に次女D女(1975年生まれ)とその娘(6歳。眼鏡をかけている。風邪気味)、四女G女(1980年生まれ)とその2人の娘たち(8歳、1歳)が来ている。デジタルフォトフレームをテレビに拡大してここでも村の写真で盛り上がる。一番小さい四女の娘を三女の夫K男がからかう。食事は買ってきた鳥の丸焼き+スープ、グラタンにデザートの手作りパスタ。料理を作った三女E女が父A男がスープをお代わりしたと喜んでいて。食事後、近所に住む同じ村、同じ親族集団(スラレ)出身の女性(1974年生まれ)の家に行く。横に父母(母1947年生まれ、父1944年生まれ)が住んでいるが、現在トルコに帰省中で留守であった。夫(1972

年生まれ、夫の母は妻の母の父方の伯母になる。1994年結婚)、息子2人(小学生)。チャイ、ベルギー・ワッフル、ギョズレメ(トルコ風お好み焼き)、トルシュ(漬物)を出してくれる。ユモシュという名前のモルモットを飼っている。夫から父母の若い時の写真があればデータがほしいと言われ、探すと約束する。

2月27日(土)

B女(+次男夫婦の娘2人)に連れられて近所を歩き回る。まず、昨夜訪問した女性の兄(1967年生まれ)の家へ。改装中とかで慌ただしが、部屋の家具は豪華である。女性の兄は歴代村長を輩出している自分の親族集団が誇らしく、村の歴史にも興味がある。記憶力がよく、一度しか会っていない1992年に村で調査していた私の服装まで覚えていた。自分の親族集団では、誰それが昔のことに詳しいとなどと推薦してくれる。本人は5、6歳の時にドイツへ来る。妻(1966年生まれ。結婚は1985年)はM村近辺の村出身で4歳の時ドイツへ来る。妻の父は1970年に訪独し3カ月デュイスブルグにいて1972年にここに来たらしい。子供は6人。長女(1986年ルーネン生まれ)はトルコのデヴレキ市出身の男性と3年前に結婚し、老人介護の職に就いていたが現在3年間の育休中。長男(1987年ドルトムント生まれ)はドイツ人の妻との間に息子がいる。ドイツ人との婚姻関係をもつ家族と初めて会った。次女(1989年ドルトムント生まれ)は独身でパン工場で働いている。職業高校出身。三女(1996年生まれ)は高校生。三女は在宅しており、高校の宿題とかでトルコ人移民を調査する日本人として私の写真を撮ったが、自分の写真は撮らせなかった。他にまだ小さい娘2人がある。B女にせかされて家を出る。次に病人の

高齢女性の家に見舞いに行く。トルコ・ゾングルダク県(Kozlu, Yaylacık)出身。略奪婚で結婚した当時の夫との思い出を熱く語っていた。隣に住む嫁もいた。次にデヴレキ市出身の女性を訪問したが留守。途中で畑仕事をしている別の女性の写真を撮る。孫娘と一緒に住んでいる女性(Civ村出身?苗字?)の家に行く。10年前に夫に逃げられて苦勞した。現在モスクで働く傍ら、インゲン豆などを育てて売っている。ゾングルダク県(Çaycuma)出身の女性を訪問したが留守。帰宅して夕食。次男の嫁N女がB女の友人女性の家に電話して訪問したいと言うが、その姑が出て、今日は嫁の具合が悪いからと断られる。B女は怒り、絶対に訪問すると意地になる。夫A男にやめておけと言われるが聞かない。B女、嫁N女、孫2人、私の5人で出発、夜道を15分ほど歩いて8時到着。嫁である友人女性が出てきてちゃんと客の支度がしてあった。次男の嫁N女に台所に来て手伝ってと言う。葉巻型パイ(シガラ・ボレイ)やポテトサラダなどボリュームのある料理を出してくれる。豪華な家、新しい家具、最近引っ越したばかりらしい。この家の長男19歳(第3世代としてイスラーム啓蒙活動に従事。もうすぐ大学受験)、長女15歳中学生(きれいな絹のスカーフで髪を隠している)、次男はちょっと反抗期。夫は政府系モスクの代表者に選出。ゾングルダク県(Çaycuma)出身。妻もバザーなどモスクで同様の活動をしている。3人の子供たちはB女のことを忙しかった母に代って自分たちを育ててくれた第二の母として慕っている。舅は入院中。帰路B女が友人女性の姑について「性根が悪い」と言い、自分が嫁と仲良くしているのが気に入らないのだと言う。帰宅後また家でもカプチーノを飲んでおしゃべり。

2月28日(日)

9:30に筆者を起こしに来た孫娘とトイレに行こうとしていた筆者が鉢合わせ。驚く。朝食は、昨日A男が近くのスーパーから1箱5ユーロで買ってきた残り物のパン(ブルチュン、チーズ付き、ケシの実付きなど多種。みんなのお気に入りのクロワッサンはすでにない)が出る。解凍ハンバーグ、ゆで卵、きゅうり、トマト、レタス、パプリカなどの生野菜をはさんで食べる。A男が今朝散歩したと言う。7:45-9:30と時間を正確に記憶している。孫娘の1人がいないので尋ねるとコーラン学校に行ったという。しまった。9:30-10:30。すでに10:45。しばらくして帰ってきた。今日は6ページ目に移れたという。(男性の)ホジャ(教師)がインターネットで説明し、それが楽しかったらしい。見たかった。参加者は15、6人で女兒のあと男児が10:30-11:30。三女E女の娘は来ていなかったらしい。もう一人の孫娘は手が痛いと不参加。サボりか? 次男H男も子供の時、2回コーランを読みとおした(ハテム)と言う。B女がいつものように筆者にもっと食べろと促す。子供のころ遊びに行って帰ってこない次男H男の所まで行ってサンドイッチを渡したこと、次男H男は恥ずかしくて食べられず友人と分けて食べたことなどを言う。B女は愛情に溢れている。さあお茶をもって居間(オトルマオダス)に行こうと言われる。またトルコのテレビ番組 *izdivacı* を熱心に視聴する。今日はどこに行こうかと言っているところに三女E女から嫁N女に電話があり孫娘の一人がとる。渡せという祖母B女ではなく母である次男の嫁N女に電話を渡す。同じ村出身の女性(1982生まれ。エッセン在住)が姑たちとともに3時に筆者に会いに来るという。彼女も筆者を招きたいと言って

るがどうするかという話になり、B女は「送りこんだ(yollamışlar)」と言われるからいやだ、恥(アユップ)だ、だいたいもう残り僅かだと反対。嫁N女は本人が決めることだとクール。結局、次の機会にということに。ザクロを食べ、洗濯物を嫁N女に渡して出発。前住んでいた家の写真を撮る。この家に現在次女夫婦と四女夫婦が住む。三女E女の家はその向かい。本当にこのあたりで大きくなったという三女E女の言葉通り小さな範囲で過ごしている。三女E女の家に着くと三女の娘と息子がテレビを見ている。B女はもってきたマンタル(しいたけ)をさっそく調理しはじめた。筆者はB女の孫娘2人とともに家に忘れたカメラの充電器用コンセントを取りに戻る。アパートの前で長女C女の娘(10歳?)とその友人2人がいるが両者とも話しかけない。イトコ(クゼン)でしょと聞くと、女のクゼンはクゼーニエだよと答える。長女C女夫婦は両親であるA男B女夫婦が住む同じアパートの階下(2階)に住んでいるが、長女C女の夫I男とB女たちは絶交状態(キュス *küs*)になっている。途中で昨日の男性の家に行き孫娘が忘れた帽子をもらう。妻が出てきたがけっこう冷たい。B女はこの男性と妹は絶交状態(キュス)だと言っていたが、キュスのはずの妹の夫が何かをもって階段を上がってきていた。この2軒の場所も非常に近い。孫娘に、三女の夫K男のところでテレビ電話をさせてもらおうかと言ってみると自分の家のほうがいいと言う。三女E女の家に戻るとB女はすでに料理を作り終えて礼拝をしている。次女D女の娘がハートのぬいぐるみを持って家の前にいたが、「ここは幼稚園じゃない」と三女E女が怒り、結局子供たちはそれぞれの家に帰ることになった。あとで孫娘が祖母B女を怒っていたと嫁N女が言う。三

女E女が筆者に料理が早いよと圧力なべを見せてくれる。三女E女の夫K男が仕事から戻り、筆者が調査した1992-1993年当時の村の写真を大画面で見る。三女E女によると、これから訪問する女性は昨日来たいと言ったが子供の誕生パーティがあるからと一日延ばしてもらったらしい。そういえば嫁N女がその誕生パーティに筆者も一緒に参加したと提案していたが、姑B女に一蹴されていた。気に入らないらしい。ここにも世代間のギャップが。M村出身の女性S女、娘（3歳くらい）、夫、夫の両親が来る。夫や夫の両親はM村近郊のS村出身であるが、M村のこともよく知っていて写真を見てコメントする。ハッジ(巡礼)の話、トルコの話、仕事の話、トルコへの行き方の話等よくしゃべる。途中でA男が来る。この人たちが、筆者が村で世話になった女性の弟たちが亡くなった事故現場の建物の持ち主であると分かる。ここで会うとは。建設業者のミスで自分たちの責任ではなかったが、葬式のときはあたかも殺人者のように扱われて辛かった。ちょっと違えば自分の息子が死んでいたかもしれないのにと。三女E女が言うように訪問者の女性の結婚した相手の家は修理工場を営んでいて経済状況はかなりいい。舅は病気のため40歳で年金をもらい始めている。妻は現在53歳。スカートを買ったが自分には大きすぎるからとB女にプレゼントしていた。家の近所にトルコ人女性について小説を書いている人がいるらしい。へー。食事は、レンズ豆スープ、インゲン豆の煮込み。A男によれば炭鉱労働者たちの食事らしい。S女の舅は国民食だと訂正していたが。さらにピラフ、マンタル煮込み、サラダ、ヨーグルト。お菓子はS女が持参。話に疲れて台所に行ってみると三女E女と訪問女性がちょっところこそ話。トイレ

に入る。途中でみんなが礼拝を順番にする。ときどき子供たちがやってくる。訪問女性の娘はポテトチップスをちゃんと「とってもいいですか」と母に聞いている。1枚だけよというのに2枚ほしいと言ひ、訪問女性は何故2枚ほしいのと聞いている。ちゃんとしつけをしていた。感心。訪問女性の夫がタバコを吸いに庭へ。訪問女性は「もっと我慢しろ」ときつい。一方で夫について「私が頼めばいつでもどこでも車で連れて行ってくれるのよ、ありがたいわ」とも言う。ふーん。姑の話では娘は父親（自分にとっては息子）をととても好きで仕事から帰ってきた父親に対して「ババ、セニ、チョコ、オズレディム（お父さん会いたかった）」と言うらしい。娘はどこでもうまくやっているようだ。9時くらいにお客が帰る。B女がようやく食事をする。大勢だったので遠慮していたらしい。三女E女が「ヨルゲンルク・カフヴェシ(疲れをとるためのコーヒー)」と言ってインスタントコーヒーを淹れてくれる。しばらくして我々も帰宅。すごい風が吹いている。門のところで長女C女の夫I男とすれ違う。初めて見た。村での時とあまり変わっていない。お互いに誰もが無言。留守番をしていた嫁N女から初日に訪問した近所の女性が客に来たこと、四女G女が明日我々を家に招待していることなどを聞く。9:30に風呂。嫁N女がドライヤーをもってきてくれる。しばらくして下に降り(10:30)、葬式や遺体搬送についてA男に聞く。日本で死体を焼くことについて聞かれ少し話す。11:00自宅に携帯電話をかけ、娘と話す。友人の飼犬が死んで、大学近くの動物霊苑に埋めるのでお祈りしてねと言われたらしい。11:30くらいに屋根裏部屋に上がって就寝。

3月1日(月)

5:30に目覚めて日記を書く。9:30に朝食。三女E女がやってきて今日は自分が案内すると言ってくれる。次男H男が三女E女のことを父に対して「ゴマスリ(ヤージュ)」だと言うと、「誰が父さんの金を使っているのか(キム パバスン パラスヌ イイヨル)」と言い返している。筆者の給料の話では、次男H男が父A男に対して「金の話は詳しいが頭が悪い」とか言う、「日本から機械をもってきて次男H男の頭を計ってみよう」と父A男が言い返す。ズケズケと言いつく人たち。たしかにA男は計算が早い。筆者の給料にすぐに反応して、パンの値段で計算する(パンはドイツで2ユーロ、トルコでは0.5ユーロ、日本はパン6枚1ユーロ)。日本の家賃が700(光熱費込で1000)、食費が10万円(1000ユーロ?)などとしても250くらいは貯金(birikim)できるだろう、投資(これもbirikim?)しないのかと言う。貯金イコール投資ということか。娘梨乃とテレビ電話。メールで朝倉書店に訂正指示。見に来た三女E女と遺体搬送ネットワーク(ドイツ在住のトルコ人が死亡したときにトルコに搬送してくれる)の会員料金について話しているうちに、2歳で亡くなった三女E女の次女の話になる。生まれてすぐに会員になりとても役立った、満足していると言う。三女E女が居間で筆者にプレゼントをくれる。黒い服、筆者の娘にスープ皿セット、Tシャツ。お返しに筆者からも皆にプレゼントを渡すが、1匹しかなかったトラのぬいぐるみで、次男夫婦の娘二人があとでなぐりあいの大ゲンカになったらしい。三女E女と外出。自動車学校を通る。免許を18歳で取得(17歳から取れる)したことを聞く。2500マルク(ユーロ?)かかった。ドイツ人の墓地に入る。イスラームについて、

スカーフを被ることで済むのならそんな簡単なことはない、問題は中身である。たとえば、落ちている財布を自分のものにしたりしない、酒を飲まない(夫K男が友人と酒を飲んだら友人が自分をちがう意図で見るともしれない)、タバコはよくないけれど禁止ではない。自分は外交的で活発な性格だが自分の権利は守る、誰の下にもならない。夫K男の姉である小姑や、母である姑は古い考えの持ち主だ。嫁である自分の行動を管理、束縛しようとする。しかし彼女らには従わない。何をするか、どこに行くか自分で決める。夫K男に不満はないが、周りは大変。小姑は同じくドイツの別の町に住んでいるが、小姑のところには行かない。姑は、三女E女の長男の名前を40代で早世した三女E女の叔父から取ろうとすると、母方からの名前だと嫌がったらしい。未来については、死んだらトルコで埋められたいと言う。E女の長男を幼稚園に迎えに行く。ドイツ人の先生2人。多国籍の園児。ドイツ語を話す三女E女。ついでにE女の長女の通っている小学校にも行く。娘にはできるだけ勉強してほしいと言う。トルコ食品の店に寄ってから友人の家へ。友人は結婚してドイツに来たばかりの22歳のトルコ人女性。夫が三女E女の夫K男の同僚なので親しくしている。夫は長くオランダに住んでいた。夫は2度目の結婚で年が37歳とかなり離れている。イスタンブールで撮ったという華やかな結婚アルバムを見せてもらう。かなり派手。台湾、中国のアルバムを彷彿とさせる。安いからと手巻きタバコを吸っている。アパートの大家ともめていて近々三女E女の家近くへ引っ越し予定。湿気によるカビで部屋の壁が黒ずんでいる。賃貸会社から手紙が来ており、三女E女に読んでもらっている。手紙には、修理のため訪問した

が、当人が部屋に入れてくれなかった、家賃3か月分を振り込めと書いてあるらしい。これを聞いて彼女は嘘だと叫んでいた。このアパートはこうした問題が多いとのこと。ちゃんと弁護士を通して解決すべきだと三女E女が助言。ドイツに滞在するためには2年間ドイツ語学学校に行ったという証明書が必要で現在民間の学校に通っている。有料。B女の嫁N女の場合は政府による学校で週2回無料だが。彼女の夫が帰宅し、我々も退去。四女G女(1980年生まれ)の家へ。次男の妻である嫁N女は注文通り、クスル(引き割り小麦で作る料理)を作って持参。子供たちが踊っているところを録画した。その後子供たちは二階へ。四女G女の夫M男は父A男の姉の子でゾングルダクから結婚のためやってきた。おとなしい。魚が趣味らしく、熱帯魚を飼い、魚をモチーフとした装飾品があちこちにある。B女とA男がやってくるが、またトルコのテレビでヤルチュン番組を見ている。しばらくして食事。スープ、グラタン、ポテトサラダ、クスルが大盛り。しかしB女はお代わりする。四女G女も父がスープをお代わりしたと喜んでいる。実はあまり料理を両親に食べさせたことがないのかも。四女G女の娘(次女、1歳)は伯母である三女E女が大好きで離れない。現在四女G女は3年間の育休中だが、終わったらもう1年働いて子供をもう一人作ったら以後働かないという計画をしている。働くときはこの娘を姉である三女E女に預ける予定。このときは気付かなかったが、三女E女には二歳で亡くした自分の次女の面影を姪である四女G女の娘にみているのかもしれない。途中でB女が隣に住む次女D女を訪問。A男はジャーミへ。四女G女の娘をからかってしばらく歓談(三女E女、四女G女、次男の妻である嫁N女、筆者)。B女

がもどってきて、次女D女はソファを新しくするのでお客をするのは都合が悪いらしいとの発言にみなブーイング。しばらくして帰宅。筆者の姑から七宝焼きのペンダントをおみやげにと渡されていたのを思い出し、B女へプレゼントする。B女は、トラのぬいぐるみで妹と大ゲンカしてあきらめた孫娘の姉のほうにペンダントを譲る。今度は妹のほうに怒って泣き出すなどの騒ぎに。悪いことをした。今回は日本人形を2人にそれぞれもってくるということで何とかおさまる。B女は自分の名から名づけられた孫娘の姉のほうが好きで、妹のほうは逆に肌の色が似ている色の白い(アクチャ・デデ)A男のお気に入りである。

3月2日(火)

次男夫婦がいない。どこかへ買い物へ行ったようだ。いつものようにゆっくりと朝食。のち、A男の運転でフリー・マーケットへ。途中で、次男H男は仕事をより好みしているから仕事が見つからないのかと聞くと、彼は誰かがずっとそばにいて指示をだしてやらないといけない人間だ、私たちは彼が悪いことをせずにおとなしく家にいてくれるのを願っているとの答え。たしかに吃音などはあるが、何か仕事はできそうなのだが。次男H男はこの夏のトルコへの里帰りを父A男とともに車で行きたいと望んでいるが、とても危ない、彼の運転を信用できないという。中古で買った車の値段などを話してくれた。近くに四女G女たちが勤めていたパン工場があった。フリー・マーケットに着いたが、すでに終わりがけていた。十分安い値段(1ユーロとか)をさらに値切るB女。二人は筆者のために靴を探してくれているらしい。ほろくみえたらしい(たしかにほろいが)。人形、プレスレッ

ト、ローゼンタールのデミタスカップ2客(10ユーロ)などを買う。B女は筆者の姑へのプレゼント用に紫のセーターを買っていた(1ユーロ)。帰宅して隣のドネル・キャバブ屋へ。ここもトラブゾン・キャバブ屋。黒海だらけ。写真を撮らせてもらう。帰宅しようとするが、玄関からベルを鳴らしても返答がない。家に誰もいないらしい。しかたなく、というか、よい言い訳ができたと思ったのか、B女は即座に階下に住む長女C女のベルを鳴らし、はいっていく。長女C女の夫I男とケンカして口をきいていない。A男は入ってこなかった。生まれたばかりの赤ちゃんを抱くB女の写真を撮る。あとでA男へ見せることができる。壁に大きなトルコ国旗がかかっている。長女C女(1974年生まれ)は一度しか村で会っていない筆者を覚えていない。私が1997年に撮った里帰りしたB女一家の中に彼女の写真がある。今度こそ帰宅する。宿題をしている孫娘を母である次男の嫁N女が手伝っている。次男の嫁N女は鳥をオーブンで焼いていた。ご馳走だ。屋根裏にある冷凍庫、地下にある全自動洗濯機を見に行く。子供たちが庭で化粧ごっこをして遊んでいる。2月27日夜に訪問したB女の友人とその娘が来る。ベルを聞いて「どなたですか?」と応対している筆者を嫁N女が「客がとうとうこんなことをするようになった」と喜んでいる。友人とその娘は階下に長女の赤ちゃんを見に行ったら戻ってきて、さらに三女E女もやってきて皆で夕食。ジャガイモの煮込み、ピラフ、フライドポテト、鶏肉。トルシュ。今日はゆっくり家にいる。

3月3日(水)

最後の日。今日も別のフリー・マーケットへ。B女が上手に車を誘導する。今日のフリマ

は昨日のよりさびれている。A男の携帯に電話がかかり、次女D女が来たというので、すぐに帰ることに。次女D女と娘がいる。チョコレートをお土産にもらう。次女D女に兄弟姉妹の結婚の過程を聞くと、簡単な説明のB女と違った話を聞いた。たとえば、長女C女は本当は三女の夫K男の兄と結婚させるはずだったがそうならず両家はケンカになり、その後三女のE女がK男と結婚することになってようやく仲直りしたとか。次男H男はドイツ語の新聞を読んでいる。四女G女もくる。四女G女に給料を聞いてみると1800ユーロだという。職場はパン工場で仕事は気に入っている。2月26日に訪問したM村出身の女性の家に彼女の夫の要望であった夫の両親の写真データを持って、B女とともに再び訪問する。途中で薬局で買い物。女性は不在だったが、外で遊んでいた彼女の息子に頼んで母を呼んできてもらう。彼女は近所の家に行った。データと日本のタバコ2箱をあげるとお返しにシャンプー、ハンドクリーム、トルコのタオル、ショールなどをどさっとくれる。勤務先のクリーニング店の袋がかわいい。一本だけタバコをもらって玄関横で吸う。裏庭や隣にある彼女の両親の家の写真を撮る。メッカに行ったときの写真などが飾ってあった。帰りに近くのスーパーで日本用のおみやげを買う。いつのまにかA男も来ている。姑用にキャンディ、夫にカレー・ヴースト、友人に塩等々。もしかして彼らが支払うつもりかもしれないのでささっとレジへ。帰宅するとバターのいいにおい。嫁N女が明日の筆者の旅用に、パンを焼いてくれた。荷造りにも次男の嫁N女は協力してくれた。20kgちょうどくらいになった。ついでに体重を計ろうということになったが、筆者は3kgも増えていてとたんに不機嫌になる。もう

何も食べないと叫ぶ筆者を次男の嫁N女が笑っている。三女の夫K男とさきほど両親の写真を渡しに行ったM村出身の女性の夫がやってくる。彼に村のすべての写真データがほしいと言われたが、即座に断る。早すぎたか。しかしね。筆者のi-podの写真を見せる。おみやげにルーネン市のマジパンを何箱もくれた。三女の夫K男には仕事場の清掃の様子を撮った携帯電話のなかのデータに移してもらったがうまくいかない。話のついでにM村出身でドイツの別の町で暮らしている幼なじみの女性が離婚したという話を彼がして三女の夫K男が驚いていた。筆者は三女の夫K男の姉から聞いていたが秘密にしておいてというので黙っていた。最後の夜で最後のカプチーノ。本当によく飲んだ。最初の晩にいれるのが得意だという次男H男に作ってもらってから毎晩飲ませてもらった。B女が筆者の姑用にカプチーノをプレゼントするというのを断ってしまったが、このとき後悔する。

3月4日(木)

デュッセルドルフ空港まで送るというA男を断り、近くのドルトムント駅まで送ってもらうことに。三女E女がやってきて駅まで来てくれる。車中、母たちがいなくても娘が4人もいるからまた来たらいいと言う三女E女に両親は無言。ネットで調べたとおり、9:12発のICE列車に乗る。駅は工事中で臨時の切符売り場だった。豪華に1等車にしようかと思ったが、たった1時間しか乗らないのに無駄使いだというA男の意見になるほどと思い2等車に。三女E女はノリコの好きにさせたらいいのにと怒っている。プラットフォームでドイツ人らしい夫婦によろしくと言う。あわてていて十分にお別れをすることもなく汽車が発発。どっと疲れがでる。

乗った列車の正確な時刻表が座席の背に入っていた。予定通りデュッセルドルフ駅に着き、危なげなモノレールで空港に。リモワ・スーツケースをちょっと見るが、重量オーバーで買えない。デュッセルドルフからフランクフルトに飛んだが、汽車でもそう変わらないことがわかり、次回はフランクフルトから列車にしようと思う。フランクフルトでは名古屋行きルフトハンザ乗降口が変更されていた。リムジンバスから飛行機に乗り込む直前に携帯電話のメールで無事に飛行機に乗れそうだとA男に知らせる。

4 フィールド日記からみるトルコ人移民の特徴

ドイツ、ドルトムント市に住む、トルコからの移民であるA男B女夫婦を中心に調査を行なった際のフィールド日記をみてきた。A男B女夫婦は、かつて筆者が長期のフィールドワークを行なったM村の出身者である。ここで浮かび上がるのは、家族間の強いつながりと出身地M村との強固なネットワークである。両者は並列というより、後者が前者の方法となっている。A男B女夫婦は子どもたちの結婚の際に誰を配偶者を選択するかを念入りに配慮している。配偶者すべてをM村から選択している。M村とのネットワークを利用することによって家族のきずなを堅固にしている。

A男B女夫婦は、長女C女にはM村出身の男性、次女D女にもM村出身の男性、三女E女にはM村出身のさらに同じ親族集団の男性、四女F女には父A男の姉の息子(A男の姉は婚出しているためM村近郊の町在住であった)、長男F男にM村出身で長女C女の夫の姉妹であるL女、次男H男にはM村出身で三女E女の夫K男の兄

の妻の姉妹を選んでいる。また、二人いる息子の一人をトルコに、もうひとりをドイツに住まわせている。4人の娘たちはすべてドイツに住んでいる。トルコ一般にもM村にもドイツ在住者と結婚することのプレステージが認識されている以上、子どもたちの多くがドイツに住むことは有利なのだ。

ドイツに住んでいる5人の兄弟姉妹はそれぞれが歩いて5分程度のほんの隣同士に住んでいる。これはM村において、親族集団が街区（マハレ）を形成し、隣近所に住んでいることと酷似している。さらにM村の同じ親族集団から別の家族が移住しており、A男B女夫婦の三女E女の夫K男が「ここはタバクラル・マハレシ（タバク親族集団街区）だ」と言ったことがあるくらい、M村どころか、M村の中のある街区が再現されている。むろん親族集団のなかにいるすべての人々が一致団結しているわけではなく、フィールド日記で現れたように、兄弟同士や、舅姑と娘夫婦のあいだで絶交状態になっている場合もある。しかし、これはドイツにおける親族集団が疑似的だから絆がほつれているわけではない。M村においても、実は親族集団のなかのほうが水利権等で利益の衝突が見られ、危機的な関係になることが多い。利益の衝突がなくても、どうも虫が好かないといった理由で行き来が途絶えがちにもなる。ドイツに住むこの家族にも、ある姪を亡くなった娘代わりに可愛がる一方、別の姪に対しては「ここは幼稚園じゃない」と追い出す女性もいる。こうした緊張状態、絶交状態すら移住先に存在しているということがまさに、ドイツのこの町にトルコの村が再現されていると言えるのではないだろうか。